

カイロプラクティック

33原則 6つの核心テーマ

33条を6つの問いに束ね直す

——洗脳ではなく、思考の出発点として

ガンステッド カイロプラクティック荒川治療院
荒川 恵史 D.C.

この資料について

33原則は1927年に書かれた哲学的体系です。100年近く経た今も「核心」として語り継がれますが、近年「盾」として誤用されるケースが増えています。

33条を一つずつ記憶させ、全肯定を求めるような教育は――カイロプラクティックへの批判的思考を封じ、患者への誠実な医療を妨げます。

本資料の提案

33条の「個別暗記」ではなく、6つの核心的な問いとして理解する。

各テーマの「現代科学との接点」と「注意点（限界・誤用リスク）」をセットで示すことで、33原則を思考の道具として使えるようにする。

6つの核心テーマ（概観）

テーマ I	生命とは何か	第1条・第2条・第3条・第4条・第14条・第19条・第20条
テーマ II	身体の自律的能力	第21条・第22条・第23条・第24条・第25条・第26条・第27条
テーマ III	宇宙の力と身体の力	第5条・第6条・第11条・第12条・第15条・第16条
テーマ IV	神経系と伝達の経路	第8条・第10条・第13条・第17条・第18条・第28条・第29条
テーマ V	干渉と不調和	第29条・第30条・第31条・第32条・第33条
テーマ VI	適応の限界と謙虚さ	第24条・第25条・第26条

テーマ I

生命とは何か

The Nature of Life

第1条

第2条

第3条

第4条

第14条

第19条

第20条

このテーマの核心

生命とは——知性（Intelligence）・力（Force）・物質（Matter）が統合された、能動的な組織化のプロセスである。

33原則は「生命とは何か」という問いからはじまります。物質（Matter）があるだけでは生命ではない。そこに知性的な働き（Intelligence）が加わり、力（Force）として表現されてはじめて生命が成立する——これが33原則の根本的な生命観です。

現代生物学の言語で言い換えれば：「生命とは遺伝情報（Intelligence）がエネルギー代謝（Force）を通じて細胞・組織・器官（Matter）に表現されるダイナミックなプロセス」とほぼ同義です。

【現代生物学との接点】

「organized matter（組織化された物質）」（第19条）は自己組織化・動的平衡と対応。「Innate Intelligence（先天知性）」（第20条）は先天免疫・神経制御・恒常性機構として実在する。

【注意点】

第1条（Universal Intelligenceの存在）は哲学的公理であり、科学的証明はできません。第14条（すべてのMatterに生命がある）は論理的飛躍を含みます。これらは「詩的な出発点」として保持し、臨床判断の根拠には使わないことが重要です。

テーマ II

身体の自律的能力

The Self-Organizing Body

第21条

第22条

第23条

第24条

第25条

第26条

第27条

このテーマの核心

身体は生まれながらに自律的な組織化・修復・適応の能力（Innate Intelligence）を持っている。術者が「治す」のではなく、身体が「治る」。

33原則の最も重要な臨床哲学がここにあります。

Innate Intelligence（先天知性）の使命は「active organization（能動的な組織化）の維持」（第21条）。その機能はUniversal Forcesを身体での使用に「adapt（適合）」させ、すべての部分が「相互の利益のために協調」することです（第23条）。

これは現代医学が「恒常性（homeostasis）」「動的平衡」「神経・内分泌・免疫の統合制御」として記述するものと構造的に同一です。

【現代生物学との接点】

第21条はキャノンの恒常性・福岡伸一の動的平衡と完全に対応。第23条は機能医学（Functional Medicine）・PNI（精神神経免疫学）の哲学的先取り。第26条（破壊と構築のサイクル）は異化・同化＝代謝として現代生化学に対応。

【注意点】

第22・27条の「常に100%・常に正常」という絶対表現には注意が必要です。先天性疾患・神経変性疾患・精神疾患では「正常なInnate Intelligence」という前提が成立しない場合があります。また第24条（適応の限界）を常にセットで理解することが不可欠です。

テーマ III

宇宙の力と身体の力

Universal Forces vs Innate Forces

第5条

第6条

第11条

第12条

第15条

第16条

このテーマの核心

宇宙の力（物理法則）は盲目的で無配慮だが、身体の力（Innate Forces）は適応的で保護的である。この対立こそが「生命のサイクル」を生む。

第11条と第23条は33原則の中で最も美しい対称構造を持ちます。

Universal Forces（物理法則）は「不変・適応しない・構造への配慮がない」（第11条）。Innate Intelligence はその力を「adapt（適応）させ・協調させる」（第23条）。そして第26条はこの対立を「破壊（Universal）と構築（Innate）のサイクルが生命を継続させる」として弁証法的に統合します。

重力・熱力学・酸化ストレス—これらの「盲目的な宇宙の力」に対して生命体が能動的に適応し続けること。これが生きているということの本質です。

【現代科学との接点】

プリゴジンの散逸構造論：「生命はエントロピーに抗って秩序を維持する」はまさにInnate vs Universal。第6条（時間の原則）は現代物理学・生物学が完全支持する唯一の絶対的命題。

【注意点】

第5条の「100%」・第9条の「Forceは常に100%」は熱力学第二法則に違反する過剰主張です。「完全な理想としての100%」ではなく、「最大限の適応を目指す傾向」として読むことが現代的に誠実です。

テーマ IV

神経系と伝達の経路

The Nerve System as Conductor

第8条

第10条

第13条

第17条

第18条

第28条

第29条

このテーマの核心

Innate Intelligenceの働きは神経系を通じて身体に伝わる。神経系は「Intelligence（脳）」と「Matter（器官・組織）」を結ぶ架け橋である。

第28条はカイロプラクティックの臨床的核心です。

「Innate Forcesは神経系を通じて作用する」（第28条）――27条分の哲学的積み上げがここで初めて解剖学的実体（神経系）と接続されます。

第17条（因果律）＋第18条（徴候は証拠）は診断の哲学的根拠を提供します。「すべての結果には原因がある」「身体の徴候はIntelligenceの状態を映す」――これはゴNSTEDの五基準（視診・神経スコープ・触診・動態触診・X線）の哲学的正当化そのものです。

【現代神経科学との接点】

脊椎が神経系の主要な保護構造であり、脊椎の状態が神経機能に影響するという洞察は現代脊椎神経学が支持。
第10条（ForceはIとMの結合子）は神経系の統合機能として精確。

【注意点】

「神経系のみ」を通じてInnate Forcesが作用するという第28条の限定は現代的には不十分です。内分泌系（ホルモン）・免疫系（サイトカイン）・腸脳相関も重要な経路です。1927年時点の知見の限界として理解してください。

テーマ V

干渉と不調和

Interference and Dis-ease

第29条

第30条

第31条

第32条

第33条

このテーマの核心

神経系への干渉がIntelligenceとMatterの協調を乱す。これが「dis-ease（不調和）」である。疾患は「病名」ではなく「協調の喪失」として理解する。

第30条の「dis-ease」という表記は革命的です。

「disease（疾患）」ではなく「dis-ease（調和の喪失）」——ease（容易さ・安楽・調和）を失った状態を指します。これは病名がついていなくても「ease でない状態」は存在するという認識であり、現代の機能医学・統合医療が「検査値は正常でも患者は苦しい」という問題に取り組むのと同じ視点です。

第32条「Coordination（協調）の原則」——すべての部分が「harmonious action」を持つ状態——これがカイロプラクティックの目指すゴールです。

【現代医療との接点】

「incoordination」概念は現代のリハビリ医学・機能的神経学が重視する協調不全評価と一致。「root cause analysis（根本原因の探索）」は機能医学の中心概念。第33条の需要と供給モデルは現代神経科学の「予測符号化理論」と構造的に近い。

【最重要の注意点：第31条について】

「身体のすべての干渉は常に（always）脊椎のSubluxationに起因する」——この「always」が33原則の最大の問題です。感染・腫瘍・代謝疾患・遺伝性疾患による神経障害はSubluxationではありません。現代カイロプラクティックの主流は「always」を「often（しばしば）」に修正しています。この修正は科学的誠実さの表れです。

テーマ マ VI

適応の限界と謙虚さ

The Limits of Adaptation

第24条

第25条

第26条

このテーマの核心

Innate Intelligenceがどれほど優れていても、物質（Matter）には限界がある。カイロプラクティックには適応領域があり、その限界を正直に認識することが誠実な臨床家の姿である。

第24条は33原則の中で最も「知的に誠実な命題」です。

「Innate Intelligenceは物質の限界（limitations of matter）によって制限される」——100%の聖域化（第7・9・22・27条）に対する内部的な歯止めです。

老化・重篤疾患・先天性異常・神経変性——これらはInnate Intelligenceがどれほど働いても「物質の限界」によって制約を受ける領域です。カイロプラクティックにできることとできないことを第24条は正直に示しています。

【現代生物学との接点】

老化生物学（テロメア短縮・ミトコンドリア機能低下・DNA損傷蓄積）は「Matterの限界」の現代的記述。「調整適応・慎重・禁忌」の三段階判断はこの原則から導かれます。

【この原則が示す臨床的誠実さ】

「いつ調整するか」だけでなく「いつ調整しないか・他医療に紹介するか」を判断する哲学的根拠がここにあります。第24条なしに33原則を教えることは、カイロプラクティックの過剰主張につながります。

6つのテーマから導く

カイロプラクティックとは何か

定義

カイロプラクティックとは――

身体が本来持つ「自律的な組織化と協調の能力（Innate Intelligence）」を信頼し、その能力の発揮を妨げている脊椎神経系への干渉を特定・除去することを主たる目的とする、手技による医療実践である。

その哲学的基盤は「すべての部分が相互の利益のために協調する状態（Coordination）」を健康と定義し、その協調を妨げるものを取り除くことを治療と定義する。

ただし、物質（Matter）には限界があり（テーマVI）、神経干渉のすべてが脊椎由来であるという主張（第31条）は過剰である。カイロプラクティックは他医療と連携する謙虚さを持つ。

6つのテーマを「臨床の問い」として使う

テーマ I	この患者の身体で、今何が起きているか	生命＝I・F・Mの統合。どこが統合を失っているか
テーマ II	身体の自律能力は今どの程度発揮されているか	Innate Intelligenceは何を回復しようとしているか
テーマ III	どんな宇宙的力（重力・荷重・ストレス）が身体に働いているか	身体はそれにどう適応・抵抗しているか
テーマ IV	神経系を通じた情報伝達に干渉はあるか	徴候（signs）から原因（cause）を読む
テーマ V	この患者の「dis-ease」の本質は何か	症状（disease）ではなく協調の乱れ（incoordination）を診る
テーマ VI	この問題はカイロプラクティックが対応できる範囲か	物質の限界を直視し、必要なら連携・紹介する

33原則は「覚えるもの」ではなく「考えるための地図」です。

6つのテーマを問いとして持ち続けること――

「身体とは何か」「生命とは何か」「健康とは何か」「私は何をしているのか」――

その問いを失わない臨床家であることが、カイロプラクティックの本質です。